

A I による監査の変化と 公認会計士に期待される役割について



登壇者紹介

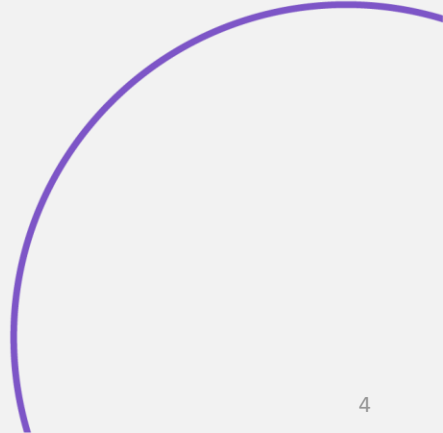
本日の登壇者

コーディネータ

- ◆ 藤井 美明-未来の監査専門委員会 専門委員長

パネリスト

- ◆ 瀧 博-立命館大学教授
- ◆ 紫垣 昌利-テクノロジー委員会 委員長
- ◆ 鈴木 徹也-未来の監査専門委員会 専門委員
- ◆ 永田 清-未来の監査専門委員会 専門委員



「監査におけるA Iの利用に関する 研究文書」 概要

本研究文書のポイント

本研究文書の目的と範囲

- 監査業務においてAIを利用する場合を中心に、関連する論点について整理することを目的としている
- 生成AIに限らず、監査で利用されるAI全般を対象としている

監査におけるAIの利用及びその課題

- 監査業務においては既にAIの導入が進められており、今後より拡大していくことが想定される
- AIを開発・利用する際の課題について理解し、対応する必要がある

今後の会計士に求められる役割と期待

- AIの利用が進んだとしても、依然として会計士による業務が必要となる領域が存在する
- AIが普及することで新たに会計士の業務領域が拡大する可能性がある
- それに伴って会計士はAIに関するリテラシーの向上等に努める必要がある

本研究文書の構成

はじめに

近年のAI及び監査を取り巻く状況と、本研究文書の目的を説明

I AIに関する基礎知識

本研究文書の検討を進める上で前提となるAIの基礎知識について説明

II 監査におけるAIの利用

監査においてAIが利用される領域及び想定されるツールについて説明
また、非財務情報への利用や、被監査会社におけるAIの利用について説明

III 監査におけるAI利用に伴う課題

開発時及び利用・導入時のそれぞれについて、AIを利用する際に生じる課題を説明
また、情報セキュリティに関するリスクについて説明

IV 今後の会計士に求められること、おわりに

AIの利用が拡大する時代において、今後の会計士に求められるスキルや、AIに関連する保証として期待される役割について説明
また、未来の会計士像と、キャリアパスについて説明

はじめに

研究文書公表の背景と目的

- 現在は**実際に監査実務の現場においてAIが導入される**ようになっている
- 監査におけるA Iの開発・導入が進むにつれ、**監査への導入が適している領域とそうでない領域**が明らかになりつつあり、それとともにA Iを利用する際の課題についても浮き上がってきている
- 近年の会計監査業務を取り巻く状況として、**会計不正を防止・発見することに対する社会からの監査人に対する期待は依然として高い**
- 監査に利用される**A Iに関する理解**を更新し、**具体的な活用方法及び課題**について改めて整理するとともに、**今後の会計士に求められる役割・期**について展望するため、本研究文書を公表する

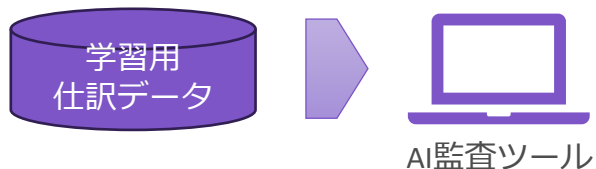
I AIに関する基礎知識

AI監査ツール

- 現時点「AI」に関して確立した定義はない
- ディープラーニング（深層学習）を元にしたAIにおいては、学習するデータによって処理結果が異なる
- AI監査ツールの用途は多岐に亘り、「異常検知」や「数値データ分析」といった観点からの応用が想定される
- 近年急速に利用が拡大している生成AIの監査利用も想定される

不正仕訳検知AIの開発・利用例

(1) 仕訳データの学習



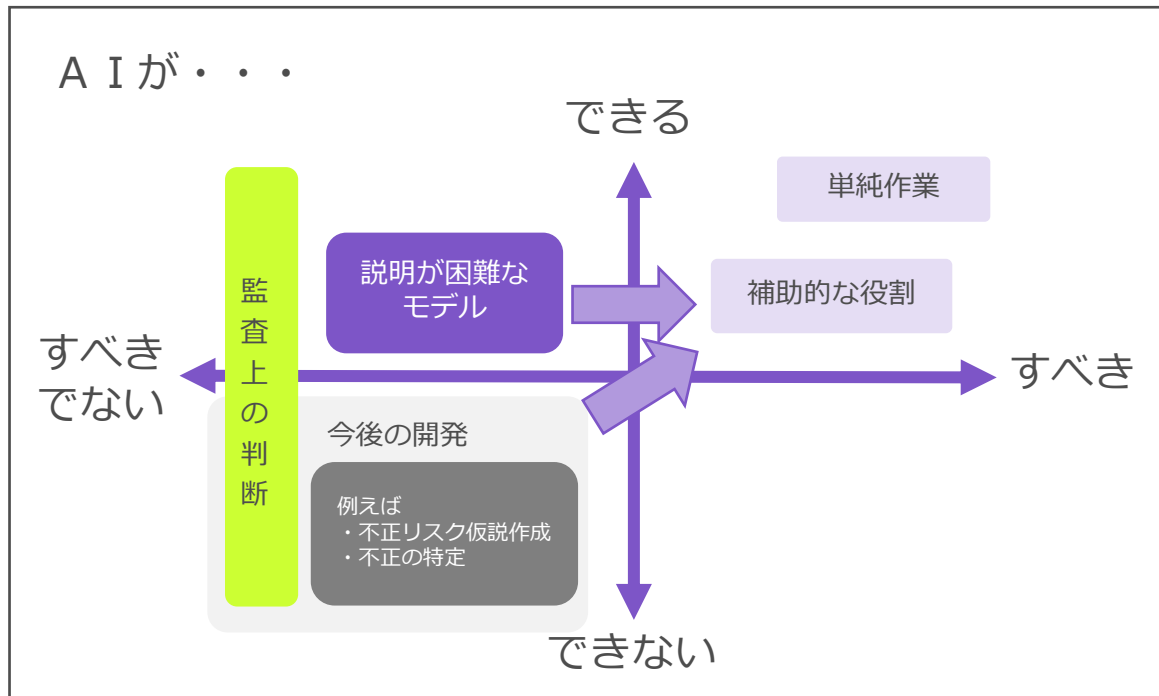
(2) 不正リスク評価



Ⅱ 監査におけるAIの利用

監査におけるAIの利用領域

- 監査業務においてAIの利用がしやすい領域、AIの利用が進むと想定される領域について、AIが「できる・できない」業務と、AIが「すべき・すべきでない」業務という軸から考察できる
- 単純作業や補助的な役割であればAIの利用がしやすい
- 監査上の判断を伴う領域や現状のAIでは説明が困難な領域についてはAIの利用が難しいと想定される
- AIを利用した場合であっても、監査人の責任は軽減されるものではない



Ⅱ 監査におけるAIの利用

想定されるAI監査ツール

- 以下のようなAI監査ツールの開発及び導入が進められている

AI監査ツールの形態

大量データを活用した
高度な分析

単純作業の自動化

生成AIの利用

想定される利用例（抜粋）

- 開示データを用いた不正リスク評価
- 分析的手続の高度化
- 証憑突合の自動化
- 開示検証の自動化
- 監査調書作成補助
- 情報収集補助

付随的な論点

- 非財務情報へのAI利用も想定される
- 被監査会社におけるAI利用も進んでいる

Ⅲ 監査におけるAI利用に伴う課題

開発に関する課題

- AI監査ツールの開発に当たっては十分な量・質のデータを入手する必要がある
- AI監査ツールを適用可能な領域についても検討する必要がある



- 使用する学習データの課題
- 監査業務の標準化の課題
- 中小監査事務所における対応

利用・導入時の課題

- AIの特徴から、AI監査ツールは全ての局面において万能に利用できるものではない
- これらのAIの特徴を理解した上でAI監査ツールを適切に利用する必要がある



- AIの精度・信頼性
- AIの説明可能性（ブラックボックス問題）
- 被監査会社のデジタル化
- 監査基準等の要求事項への適合性
- 監査チームの課題
- 監査事務所及び規制当局における品質管理の課題

Ⅲ 監査におけるAI利用に伴う課題

情報セキュリティに関するリスク

- AI監査ツールの開発や利用には大量の被監査会社の情報を扱うこととなる
- AIの特徴から、以下のような情報セキュリティリスクが存在する
 - AI監査ツールに機密情報や個人情報を情報セキュリティに配慮せず入力してしまう
 - 入力データが生成AIの学習データに利用されてしまう
 - 生成AIの回答に他社の機密情報が含まれていて、それに気づかない



- これらのリスクを理解した上で、適切な低減策を講じる必要がある
 - 不適切なAI利活用を禁止するガイドラインやマニュアルの策定
 - AI利活用に対する教育（AIリテラシー）
 - AI利用のモニタリング
 - AI法規制の遵守
- AIの利便性と情報セキュリティリスクのバランスをとった適切な利活用が求められる

IV 今後の会計士に求められる役割と期待、おわりに

AIによる代替困難な領域

- AIの特徴から代替困難な領域は引き続き存在する
- AIに代替させようとしている業務について、正確に定義できているかにも留意する

AIに関連する保証

- 社会においてAIの利用が進むとともに、AIによる社会的なリスクも拡大している
- AIの信頼性を高めるため、会計士がAIに関連する保証業務等により貢献できると考えられる



未来の会計士像

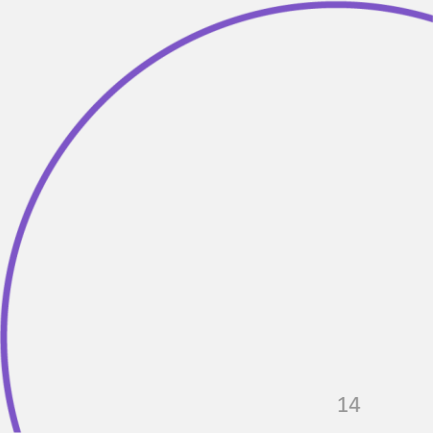
- AIの導入により会計士が不要になることはないが、AIの活用に関連して会計士に必要なスキルセットも変化する
- 未来の会計士が担うべき役割は変化し、それに伴って、キャリアパスも多様化していく

おわりに

- AIの利用は、公認会計士の業務領域の拡大をもたらす可能性がある
- AI活用により、拡大する社会の期待に応えることが求められる



監査現場における監査AI活用状況



大手・準大手法人におけるAI活用状況

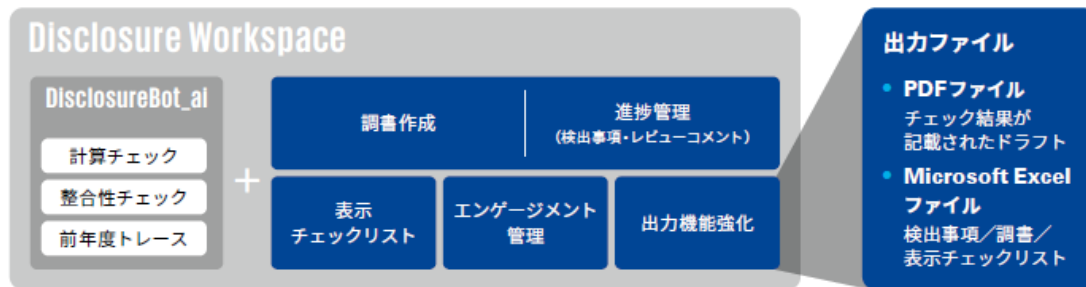
項目	活用例
①データの利用・分析	□ 有価証券報告書等の開示データによる不正会計予測 □ 総勘定元帳（仕訳）レベルでの会計仕訳異常検知 □ 補助元帳、その他のデータを用いた異常取引検知 □ 高度な分析的手続の実施
②自動化による監査手続の効率化	□ 証憑突合の自動化 □ 確認の自動化 □ 開示検証の自動化
③監査品質の担保	□ 電子調書の利用・高度化

生成AIの活用例

項目	活用例
監査手続実施補助	□ チャットボットにより特定の勘定科目について、要求される監査手続を提示する □ 被監査会社の業界や財務状況から想定される監査手続を提示する
監査調書作成・査閲補助	□ 実施した監査手続とその結果について、監査調書のドラフトを作成する □ 計画した監査手続と監査結果の内容を読み込み、それぞれ要約を行い、矛盾があれば検知する
その他資料作成	□ 経営者とのディスカッションや監査チーム内の討議等において、議事録のドラフトを自動生成する

業務の標準化・自動化の例 ①

■ 有限責任あずさ監査法人 開示資料検証支援ツール



Points

- 開示数値の計算チェックだけでなく、開示書類内部（本表と注記）の整合性チェックや、前期資料と一致すべき箇所の一致確認も自動で実施
- 計算書類、四半期報告書やIFRS®会計基準にも対応
- 検出事項のリスト化と進捗管理や監査調査の作成までツール内で完結

（出典：AZSA Quality 2023/24）

業務の標準化・自動化の例 ②

■ 有限責任あずさ監査法人 証票突合ツール



(出典：あずさ監査法人HP)

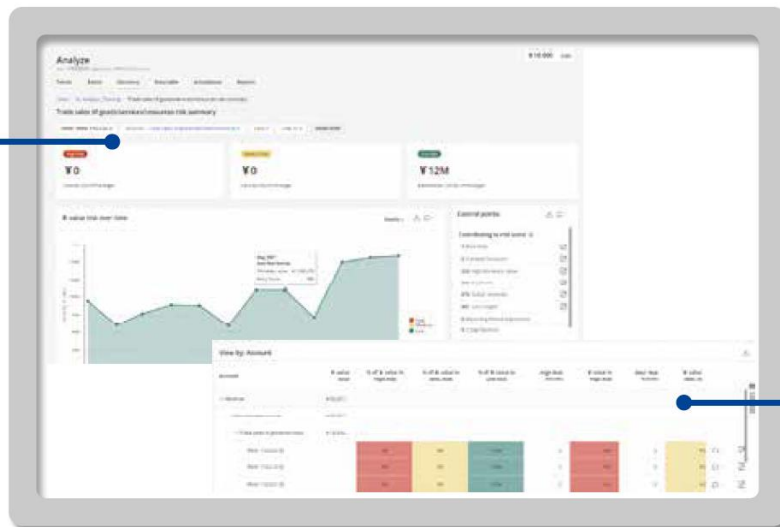
データ利用・分析/AIの例 ①

■ 有限責任あずさ監査法人 取引レベルの誤謬・不正リスクスコアモニタリング

Risk overview (リスクスコアリングの概要を把握)

1

- データに含まれる仕訳・取引のリスクレベルを高・中・低に分け、それぞれの金額ボリュームを表示
- 仕訳・取引の発生量とリスクレベルを時系列で可視化



2

- 勘定別のリスクレベルを可視化
- リスクレベル別に各仕訳・取引を分類



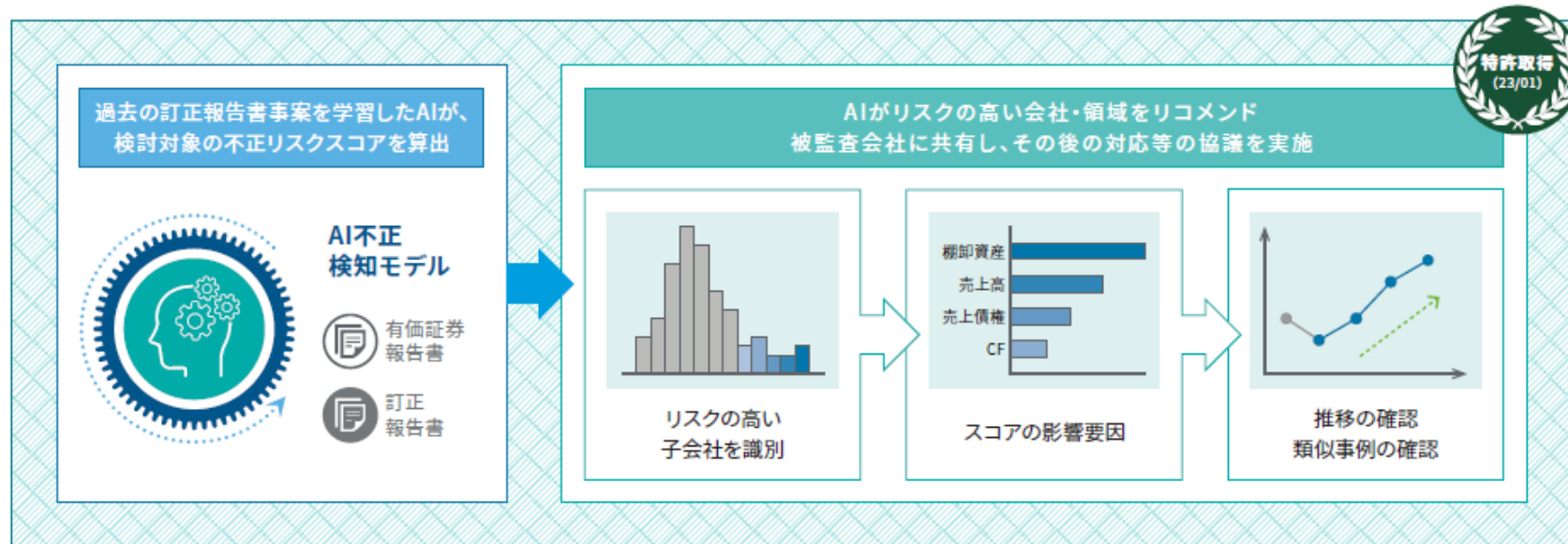
より詳細な画面へ遷移し、仕訳・取引の内容を確認

リスクの程度に応じた監査対応を行う

(出典：AZSA Quality 2023/24)

データ利用・分析/AIの例 ②

■ 有限責任監査法人トーマツ AI不正検知モデル（出典：監査品質に関する報告書 2023）

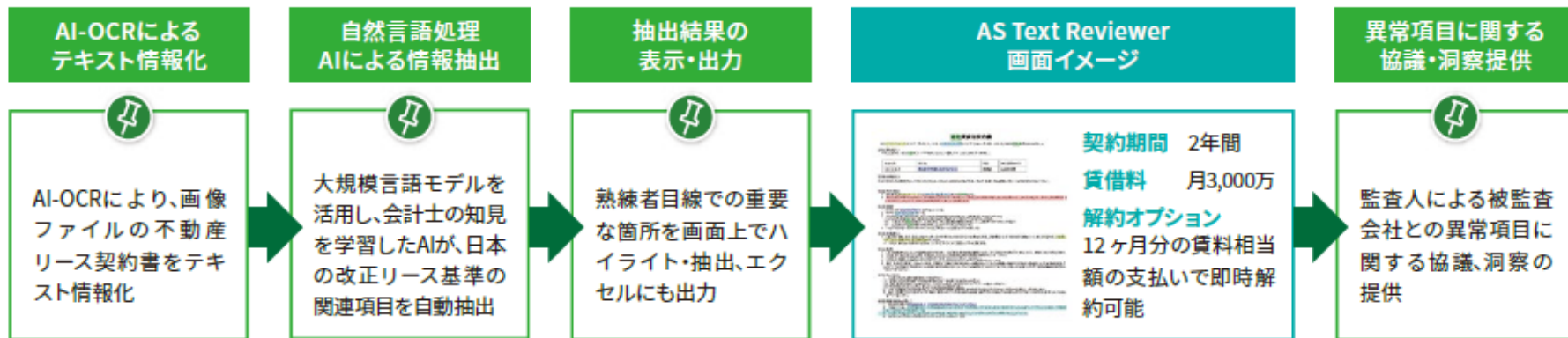


（出典：監査品質に関する報告書 2023）

データ利用・分析/AIの例 ③

■ 有限責任監査法人トーマツ 画像・文字認識技術の活用

■ 不動産リース契約にAS Text Reviewerを活用する場合のプロセスイメージ



(出典：監査品質に関する報告書 2023)

中小監査事務所のデジタル化支援

中小事務所のIT担当者間のネットワーキング、業務アプリケーション及び監査ツールについての情報交換、ベンダーもしくは他法人のIT活用状況の紹介およびデモンストレーション等を通じて、**中小事務所のIT担当者や公認会計士のITスキル、ITリテラシーの向上**を図る。

- 大手法人の先進的な取組の情報収集や意見交換
- 会計システムベンダーとのデータ分析機能の実装に関する意見交換

ITコミュニティ
の開催

共同ITインフラ
環境の整備

新ツールの調査

研修会の開催

中小事務所
Dxフォーラムの開催

- 中小事務所の共同インフラ環境の整備の一環として、協会の助言・協力のもと合同会社監査D&Iコンソーシアムが設立。中小事務所向けに、**電子監査調書システムをセキュアな環境で利用可能なクラウド型ITプラットフォームの構築支援**を行っている。
- 協会とは別個の事業体であり出資関係はないものの、設立後もオブザーバーとして情報提供や意見交換等によりサポートしている。

- 実務担当者向けのデータ分析に関する研修会
- BIツールを利用したデータ分析結果のビジュアル化に関する研修会
- サイバーセキュリティ対策に関する研修会、等

- 中小事務所のIT活用をテーマとした講演会と、中小事務所が活用できる**IT製品・サービスを扱うベンダーによる展示・交流会**の2部構成(2023年2月開催)
- **中小監査事務所のIT担当者とITベンダーとのネットワーキングの場**とする狙い

AIを利用することの課題 ①

開発に関する課題

- 使用する学習データの課題
- 監査業務の標準化の課題
- 中小監査事務所における対応

利用・導入に関する課題

- AIの精度・信頼性
- AIの説明可能性
- 被監査会社のデジタル化
- 監査基準等の要求事項への適合性
- 監査チームの課題
- 監査事務所及び規制当局における品質管理の課題

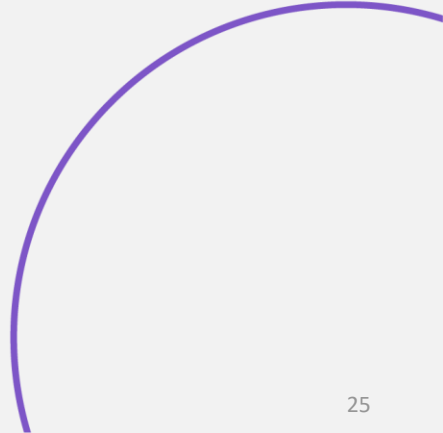
AIを利用することの課題 ②

情報セキュリティに関するリスク

- AI監査ツールに機密情報や個人情報を入力してしまう
- 入力データが生成AIの学習データに利用されてしまう
- 生成AIの回答に他社の機密情報が含まれてしまう

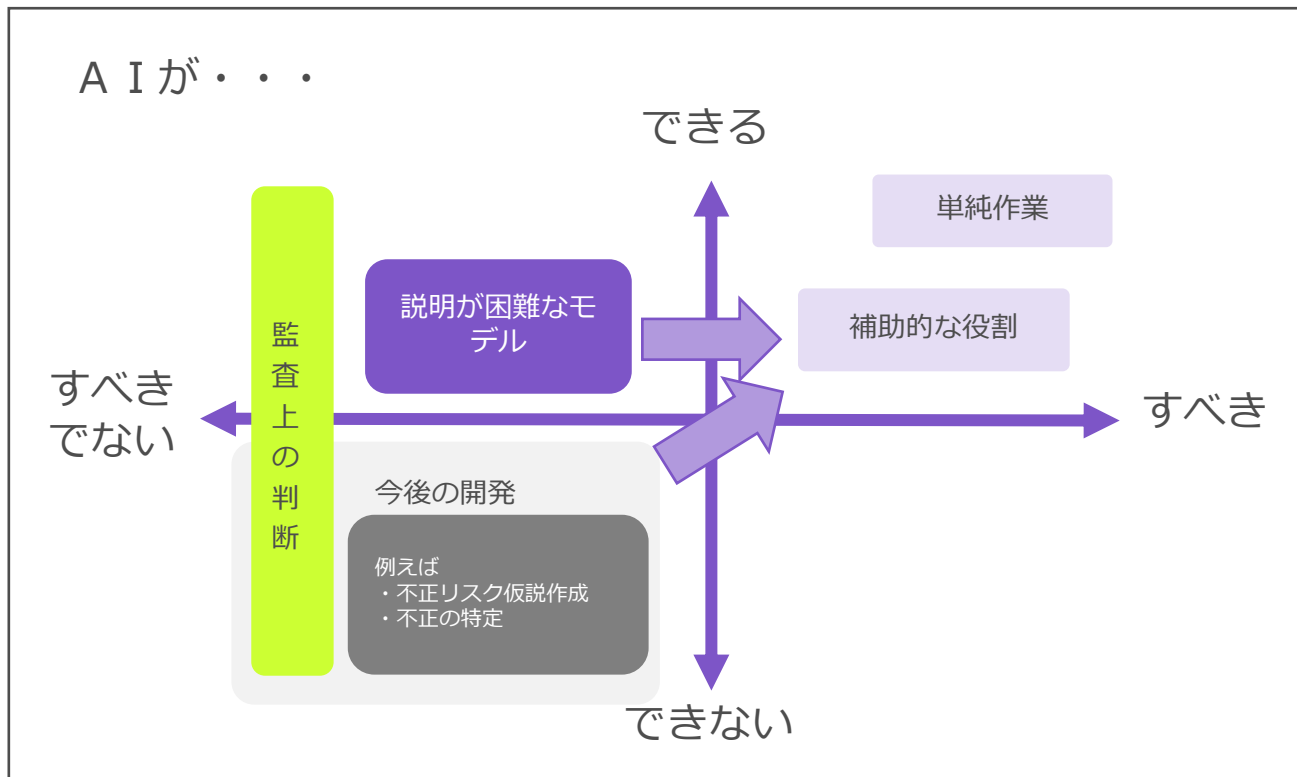
情報セキュリティリスクへの低減策

- 不適切なAI利活用を禁止するガイドラインやマニュアルの策定
- AI利活用に対する教育（AIリテラシー）
- AI利用のモニタリング
- AI法規制の遵守



これからの会計士に期待される 役割について

今後も会計士に残る監査業務



AIに対する保証

AI普及に伴うリスクの増加

- 陳腐化したAIモデルの利用
- AIに差別的な判断
- 生成 A I の不適切な利用（ディープフェイク）



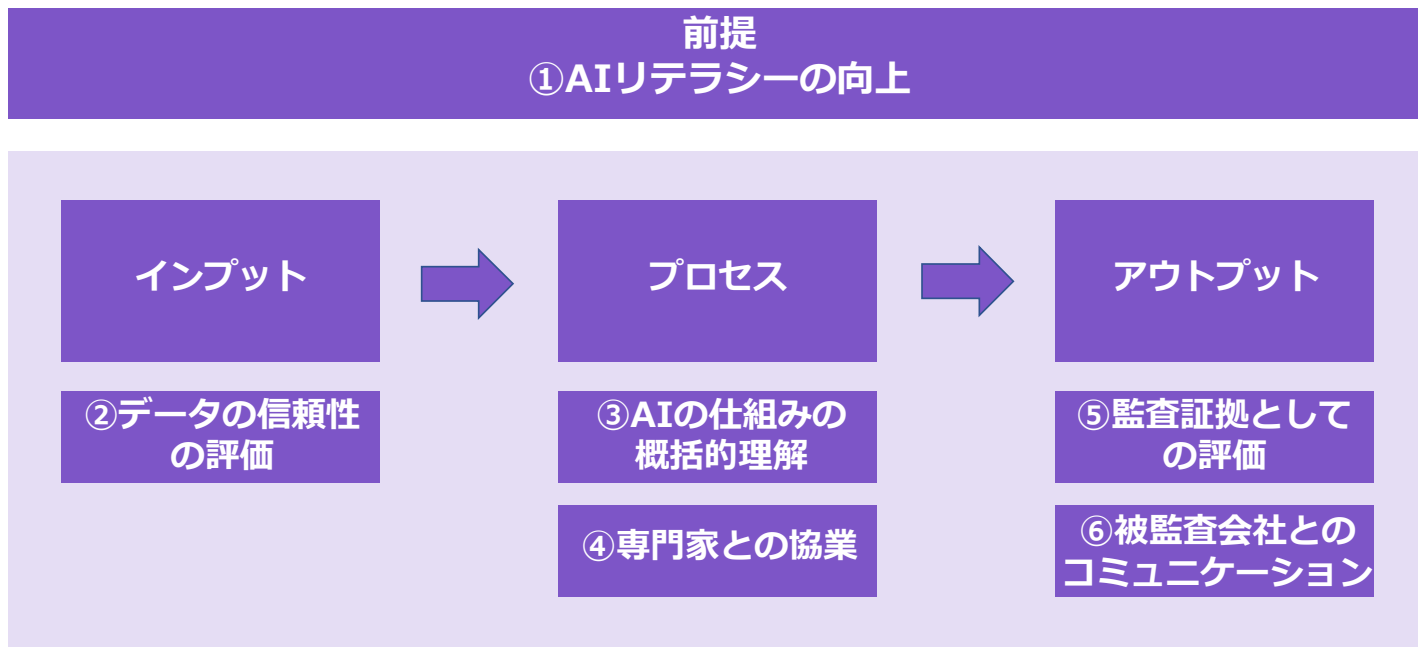
第三者による信頼性付与
の必要性

AIに対する保証

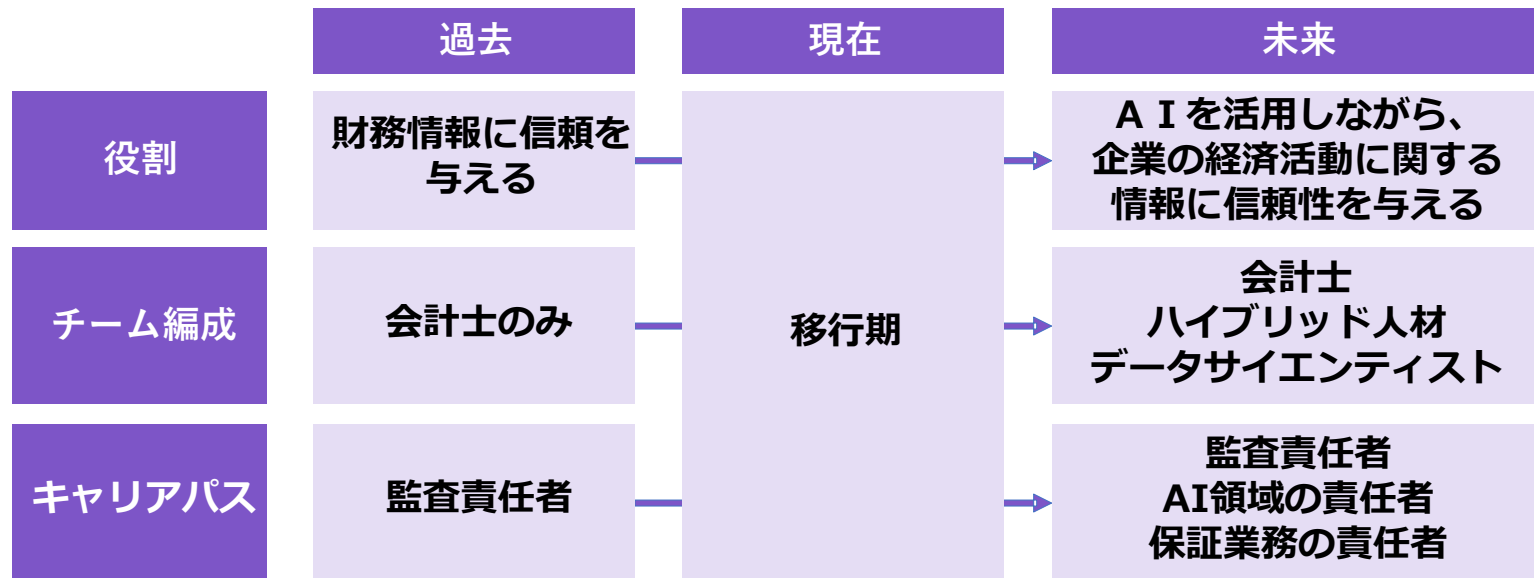
検討すべき論点

- AIをどのように管理するか（管理基準）
- AIをどのように保証するか（保証基準）

これからの会計士に求められるスキル

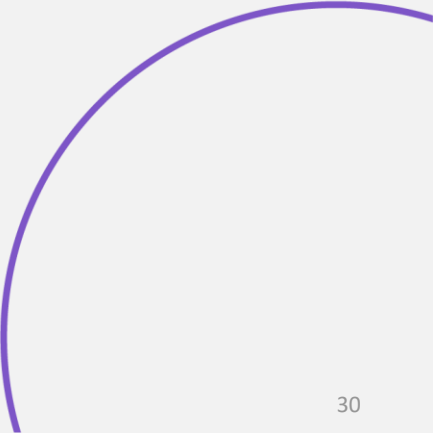


会計士の役割の変遷





登壇者からのメッセージ



●●信頼の力を未来へ
jicpa

